



雲の子



せり～ぬ少納言

(0)

Kに捧ぐ。
(Dedicated to K.)

1.

1.

テニスコートのすぐ隣には広大な雑木林がある。その中心に、まるで世界の忘れ物のようなぼかんとした空き地がある。コーチ曰く、おばあさんの話によると大昔の巨人の足跡なのだ、と。部員たちの間でこそ『足跡』で通っていたその場所も、普段コートと縁のない他の部の生徒にはあまり知られていない。私はよく練習帰りにそこへ立ち寄った。何をするわけでもない。ひとり短い草叢に寝転がって、暮れていく陽の光彩と雲の戯れを眺めたり、木々のざわめきに時折遠くのラリーが拍子をつけるのを聴いたりしていた。

けれどあの日は違った。隣には確かに哲也がいた。

「誕生日おめでとう」

そう言って哲也は鞆から小さな袋を取り出した。

「十六って、微妙だよな」

単純で肝心なことほど上手く言葉にならない。ありがとうの代わりに、私は照れ笑いを返した。

「成人式ないし、七五三とかもないし。何となく、祝いそびれていいよ、みたいな」

「確かに。俺んとき、そびれてみる？」

私は首を横に振った。そこへシルバーのネックレスがかけられた。四葉のクローバーのトップにピンク色の小さなストーンがはめ込まれている。

「安物だけど」との哲也の弁明。私はもう一度首を振った。真新しい相棒が嬉しそうに、またいくらか誇らしげにチャランと鳴った。

2.

2.

「もしもし？ 聞こえてる？」

ジェシカの声に由里は慌てて顔を上げた。一瞬、高校時代のようにドトールの座席で向かい合っている気がしたのだ。

「ああ、うん。皆によろしく言っといてね」

「よろしくねって、まさか由里、ホントに来れないの？」

受話器の向こうで何かがさがさいうのが聞こえる。

「そのまま送ってもらうとか出来ないの？ てか、あたし迎えに行くわ。ね？ そっちまで」

「無理だって。往復三時間かかるよ。ごめんね、ありがとう」

なら美奈子に――と言いかけているジェシカを遮り、由里は更に念を押した。

「マジ、私に構わないで楽しんできてよ。痛いけど、前ほどじゃないからさ。面倒かけちゃったね。そろそろ戻らなきゃ……」

多分もう診察に呼ばれている。付き添いの子が中から手招いているのが見える。予定通りの嘘で締めくくると、一方的に通話を終了した。

3.

3.

「その腕、どうしたの」

私が思い切ったずねると、哲也はおもむろにネックレスをいじる右手を止め、

「え？ あ、これ？ 今言われてはじめて気付いた」

と笑った。

「またお父さん？」

出来るだけ何気ない調子のつもりだったのに、実際に口から出てきた声は思ったより低く、からからとしていた。

「のぞみから聞いたのかあ」

哲也はあくびしながらのびをし、首をまわしている。

「親父は母さんがいなくなって寂しいだけだよ」

私は何と返事をしていいのかわからなかった。ただ黙って上膊の大きなあざと、筋肉の隆起を見つめていた。傾きかけた陽がちょうどそこに影をつくっている。黒々として見えるのはそのためだけだろうか？

「痛くないんだよ、全然。長袖着てくりゃよかった」

察したようにあざ全体をこするような、隠すような動作をした後、哲也はその腕で私を引き寄せた。百の言葉と思いの代わりに、私は自分の頭を哲也の胸に押し付けた。

4.

4.

休日の浮橋は平日のそれが信じがたいほどの静けさだ。車のないただっ広い通りや、その両脇に連なる空っぽのオフィス街の光景などは、閑散を通り越して一種幻想的ですからある。今日のように晴れ上がった夏の日には特に、容赦ない照り返しのためいっそうその趣が強まる。

由里はただ自宅を目指して歩いていた。電話のためだけに、自分はどうして本当に病院の前まで行ったりしたんだろう？ ただベランダに出てかければよかったのに。背中や首筋だけでなく、お腹からも汗が噴き出してくる。サングラスを忘れてきたせいで目がちかちかする。

そうやって暑さや眩しさにいちいち苛立つのは、あるいは本来の罪悪感から逃れる無意識の試みだったのかも知れない。

けれど交差点の手前で曲がり、路地のささやかな冷暗に身を浸した頃にはもう、それは三たび由里を捕らえていた。

5.

5.

哲也といると全てが現実味を失った。周りの景色や試合中のミスだけでなく、哲也が哲也であることや私が私自身でいることさえも。それは心地いい恋のときめきとは少し違って、むしろ絶え間のない喪失の予感に似ていた。

だからあんな風に抱きついてしまったのだろうか。まるで二人の存在と、その境界を確かめるように、強く。

「苦しいよ」

哲也は私の背中をポンポンたたいて、嘔き出した。私は慌てて少し体を離れた。ナイーブな羞恥心が全身をくすぐった。

「由里、かわいい」

哲也の両掌が私の頬を挟み、再び自分の方へ引き戻そうとした。私は負けじと頭を振って応戦した。けれど肝心の援軍が本心と自尊心に分かれて、内輪揉めしていた。私はそのことすら自覚出来ていなかった。

「あ！」

苦し紛れにどこか上の方を指差してみた。何でもよかったのだ。哲也がそれに気をとられ、力を緩めたわずかな隙に、今度こそ包囲網をくぐるのに成功したのだから。

6.

6.

越してきた日以外、由里はマンションのエレベーターを使ったことがない。ひとつには見も知らない他人と乗り合わせるのを避けるためであり、またもうひとつにはあの特異な一胃から空気がせりあがってくるような一浮遊感を嫌ってである。

そんな訳で由里はわざわざ階段を上り下りする。最上階であり彼女の家の玄関先でもある六階まで。非常用の飾り物のせいか、階段は狭くて段差が大きくて且つ急である。今日のような猛暑日、または逆に強風の真冬日、あるいは高いヒールを履いている日や荷物の多い日などはそれだけでトレーニング並のきつさだ。

もっとも、そのお陰でテニスをやめた今も体重を保っているのだから、多少大変でもこの習慣を変えようとは思わない。

玄関を開けると頭上でセンサーライトが白く点灯した。カチッと細い枝が折れるような音しか立てないから、ここに住みはじめて二年目になる今でもたまにビクついてしまう。

これもまた飾り物のような廊下を二、三步進むと、そこが由里の生活空間だ。キッチン、バス、トイレは別で、八畳一間。お世辞にも広いとは言い難いけれど、かりそめの都市生活において、これ以上の高望みをするつもりもない。

デスクチェアに座る。バッグから携帯を取り出して、開く。不在着信が二件。どちらもジェシカからだ。

夜になったらたらかけ直そう。そう思ってボタン操作している間に、ちょうど新しいメールが届いた。美奈子からだ。件名が「元テニス部一同より」となっている。

「副部長お、また這ってでも来い！（笑）」

読むなり由里は携帯を放り投げた。それは恨めしそうな音を立ててフローリングの床に落ちた。高三の春、由里は文字通り這って練習試合に行ったことがあった。前日の自主練時に躓いて両足首を変な方向にひねってしまったのだ。その日のうちは何とかなったものの、当日の朝起きてみたら立てはしても歩けない程に痛みが酷くなっていた。由里を見るなりコーチは当然試合には出せないと言い、十分くらい食い下がったけれど、結局はその足で近場の整形外科に送られた。

目を閉じて、台風のように過ぎた日々を由里は思った。そして雲一点もない今と未来に呆然とした。

7.

7.

「何？ え、何だった？」

そう言いながらしきりに哲也は空を仰いでいる。私は勝ち誇ったように仰向けに寝そべった。哲也もすぐ隣に来てそれに倣った。

「何でもないよ。雨降るね、今夜は。絶対」

哲也はそれでもまだ意味を解せないらしく、怪訝そうに私の横顔を見た。空には夕焼けを埋めようともいうように堆く雲が積まれていた。私は哲也の方に向き直って、

「ちっちゃい頃、わたあめとかクッションみたいに雲ってふわふわしてるんだと思わなかった？

トランポリンみたいに飛び跳ねられるの」

と、ふと思い出したことを口にした。

「思った。けどそれって、雲の上をだろ？ 俺は逆。逆さまに、雲の下側を飛び跳ねる」

「危ないじゃん。落ちちゃう」

「違うよ、何ていうか、逆なんだよ。俺らが雲に向かって落ちてくの。地上から」

「何それ、こわくない？」

「こわくないよ。雲が受け止めてくれる」

私は幼い哲也が灰色の空に落下していくところを想像した。風もなく、鳥達のさえずりもない。木々や家々はレゴのブロックみたいに小さくなって、哲也は王様のお城を組み立てる場所を探している。あそこだ！ そう思った瞬間、突然気流が生じて雲に着地しそこなってしまう。そしてそのままどこまでも、大気圏の外まで落ちていく――。

「やっぱりこわいな」

私は真顔で呟いていた。

そう？ と哲也はしばらく考えて、

「なら、俺が階段でも作っとくよ。由里はそこを下りてくればいい」

8.

8.

ジェシカの携帯に出たのは美奈子だった。

「由里？ 元気？ てかちょっと何ホネとか折ってんの！ え、ひび？ ほんとだよー。由里以外全員来てんだからあ。ひさしぶりに皆で打ち合ったしー。てか、ジェシカだけマジになっちゃってさあ。ダブルス組んだ時、鈍っただの、もっと考えて打てだの、さんざん文句言われてさあ。鬼部長健在だよねーほんとに！ え、今？ まだ解散してないよ、『足跡』にいる。ジェシカ？ 分かんない、さっきまでここに居たんだけど多分酔っ払ってどっか行っちゃったー。由里、成人式にはこっち帰って来るんでしょ？ ホント、そんな時は絶対会おうね！ また皆集めて一緒に飲もうね！ うん、じゃあうちもまた電話かけるね。ホント早く治しちゃいなよー？ はーい、じゃまたねー」

私たちはしばらく雲への階段について冗談を言い合った。螺旋状のにしようと哲也は提案してくれたけれど、私は断った。真っ直ぐな方がいいな。なるべくはやく下りたいから。でも落ちたとき危ないよ？ 結局、あいだをとって踊り場付きのものということで落ち着いた。階段は『足跡』の入り口に取り付けることにした。

それにしても、と私は言った。

「なんで『足跡』のこと知ってたの？」

哲也はかぶりを振った。

「巨人の話は初耳だったよ。ただ、昔よくここに遊びに来たんだよ。確か幼稚園とか、小学校低学年の頃。のぞみと、休みの日には親父も一緒だった」

前はパパもあんなじゃなかったんだ。私はいつだかのぞみがそう呟いたのを思い出した。あの時も私はただ頷くだけで、励ますことも慰めることも出来なかった。

「面白いとこだよな」

沈黙の中を漁っていた私は思わず溜息を付いた。

「何にもないけどね」

いつの間にかあたりは暗くなっていた。ますます世界はぼんやりと、遠のいて見えた。満月と半月の間くらいの名前も知らない月が、雲に潜んでこちらを伺っていた。哲也は何か重大な秘密を打ち明けるように、耳元で囁いた。

「由里がいる」

おそらく蝉の声がしていた。けれど聞こえてくるのは宙に投げ出された心臓の鼓動だけだった。私は泣いてしまった。笑いたかったのに。愛しさと果てのない孤独が、後から後から溢れてきて止められなかった。

10.

10.

ジェシカの二日酔いはだいぶ収まったようだ。

「ただの亀裂骨折だった」

翌夜、由里がその日の朝の電話と同じことを改めて伝えると、

「全然大したことないじゃん」

と怒りながらも安堵するような口調で言った。

「休みの日の真っ昼間から何してたのよ？」

由里はその質問には直接答えずに、取り繕った。

「ホント、こんななら行けたなって今になって思うよ」

「心配して損したわぁ」

ごめんね、と由里は詫びた。

「美奈子にも、来なかったの私だけって言われちゃった」

ジェシカは急に黙りこんだ。お風呂先入っていい？ あら電話中？ 失礼。 ブラジル生まれフランス育ちのアメリカ人の母親が、淀みない日本語でそう言うのが聞こえた。由里は枕元の時計を見やった。だいたい午後十一時三十五分。薄闇の中で秒針だけが正確さを誇示しながら、きりりと仕事をこなし続けている。電話を切ろうと口を開きかけたその時、ジェシカが不意に、搾り出すような声で言った。

「正確には、のぞみも来なかった」

秒針の手が止まった。

「誰にも言わなかったけど……だいぶ前、のぞみにもメールしたんだ。テニス部で集まろうって。アドレス変わってて、返ってきちゃったけど」

そうだったんだ、と答えるのが由里には精一杯だった。

「あのさあ、由里」

ジェシカはためらいながらも言葉を続けた。

「どっちみち来れなかったんでしょ。本当は……西山君のことで」

11.

11.

「どうしたの」

哲也は驚いた様子だったけれど、それ以上何も聞かずに私が落ち着くのを待っていてくれた。
私はその腕の中でしゃくりあげながら、

「分からない。自分でも。何でなのか」

とようやく言い切った。

「俺もあるよ。たまに何か泣きたくなる。まあ泣かないけど」

「何でえ？ 泣いちゃえば楽なのに」

不意に哲也の体が私のそれを離れた。涙を拭いつつ顔を上げると、まじまじと私を覗き込む二つの目と出会った。世界一きれいな目。星を、月を、宇宙を、そして小さな私の姿を内包する。

けれどそこにあるのは戸惑いと躊躇いの色だった。それは瞳の暗褐色と混ざりながら、哀切へと移ろった。今度は逆に私の方が驚く番だった。哲也の見えない涙がずっと私の中を流れた。

「ずっと一緒にいてくれる？ 由里。ずっと一緒にいて」

あんなに悲しい別れの言葉を私は聞いたことがなかった。

12.

12.

「あれはホントに不幸な、残念な事故だったんだよ。由里が自分を責める理由なんてどこにもない」

「でも私は……知ってた」

「かといってどうすることも出来なかった」

「ううん。あの日だって、哲也と一緒にいた」

「ねえ、まだそんな風に思ってるの？ 辛すぎるよ。由里は悪くない。絶対。もしくは、皆悪いの」

「一番悪いのは私とのぞみでしょう」

「違うって……止めてよ。お願いだから」

「私はただ自分が許せないんだ」

「ならもう許してよ！ 誰にも過去は変えられないんだよ」

「でもそれでも変えたいんだよ。全部変えたい。それで全部忘れたい」

13.

13.

雨は家に着くなり堰を切ったように降り出した。横殴りの雨だった。階段の小窓を閉めながら、私は哲也のことを案じた。濡れないで帰れたかな。傘持ってなかったのに。

「ずっと一緒にいてくれる？ 由里。ずっと一緒にいて」

頭の中で哲也の声がこだましていた。リピートする度に声は不純物が取り除かれて、実際に聞いた以上の現実味を伴ってきた。私は思わずひとり含み笑いしていた。

雨はますます激しさを増していった。どこかで洪水になっていてもおかしくない。押し流される看板や自転車を想像しながら、私は私だけの、喜びにも似た不謹慎な闇に浸っていた。電気をつける気がおきなかった。つけたとしてすぐに停電になっただろう。

雷鳴が絶えず轟いていた。こわさは感じなかった。清々しい気分だった。時々、歓迎のような稲光が窓を突き抜けた。家中の闇が黄色っぽい青緑に染まった。

14.

14.

「遅くまでありがとね」

「こっちこそ、色々思い出させちゃってごめん」

「ううん」

「あのさあ。由里はあんま言ってくんないけど、ってかあたしじゃ役に立たないからかも知んないけど、それでも力になりたいって思ってる」

「もう十分なってるよ」

「もっと甘えてくれていいし、泣きわめいたりとかキレたりとかしてくれていいし。由里は何か、自分を抑えすぎちゃってる感じがする。もっとあたしみたいに、ウアーってやった方が楽だよ？ あたし、すぐ人が話してても言い返しちゃうし、怒ってるみたいな言い方しちゃうけど、そういうんじゃないで、励ましたいだけなんだ。だから」

「分かってるって、そんなん。ホント助かってる」

「それに由里結構かわいいんだし！ もう一生恋しちゃいけない、なんて思っちゃだめだかんね？ あんたが好きじゃなくても、あんたのこと好きな人、いっぱいいるんだかんね！」

「ははは……だといいいけど。頑張るわ。おやすみ」

「おやすみ。何かあったらいつでも連絡ちょうだいよ？」

15.

土曜日も日曜日も、のぞみは練習に来なかった。私は先輩達に混ざって公然と悪口を言った。無性に苛立っていた。今思えば、あれ以来一度も哲也から連絡がないせいだった。

金曜日の天気が嘘みたいに、空はどこまでも晴れ渡っていた。雲の気配すら感じられない。これじゃあ階段下りていけないじゃん、と考えた途端また自分に腹が立った。恒例のドトールも断って、私はそそくさと荷物をつめ、部室を後にした。まだ着替え途中のジェシカが中から叫んでいる。

「あーもう、やばい、ミラノサンドA食べたい！ まじ食べなきゃ死んじゃう！ 由里い、あたし死ぬよ？」

テニスコートを横切って『足跡』に向かった。部長と大原先輩が残って、一番奥のコートでレシーブの練習をしていた。お疲れ様です、と声をかけたけれど聞こえないようだった。バッグをフェンスの向こうの雑木林に放りなげ、自分もよじ登る。雑木林にはまだ土砂降りがしみついていて。土や草の湿っぽいにおいがした。

反対に、『足跡』は眩しいくらい乾いている。私は目を細めた。飛行機が頭のずっと上の方を横切っていった。それがなぜか池の底の鯉に見える。

鯉はどこに向かっているんだろう？ どこまで行ってもどこに行き着いても池から逃れられない。そのことを、ちゃんと知ってるのかな？

なかなか陽は暮れなかった。私はさっき副部長にもらったプリクラを手帳に貼りながら、首に付けたネックレスを持って余していた。

その時携帯が鳴った。慌てて手に取ったけれど、のぞみからだった。一気に出る気力がなくなって、でもまたすぐに思い直した。哲也の様子を聞きだそう。そんな下心からだった。

16.

以降の出来事を由里はよく覚えていない。思い出せるのは、非現実じみた粗い記憶の断片だけだ。ひとつひとつの前後関係や関連性も定かではない。

夏休み明けの、クラスメートからの視線。噂。同情。新聞見出し。『男子高生、暴力の父殺し自殺』「西山のぞみ、転校したんだって?」「葬儀は親族の内で営まれました」献花。割れた窓ガラス。カウンセラーの眉から一本だけ長く伸びた毛。

午前二時をまわっていたけれど、寝付けそうにもなかった。いつの間にか時計は元の仕事に戻っていた。いつだって万物に不平等に流れていく、あの無機物を事務的に扱う仕事に。

父親とは一体どんな存在なのだろう。罪悪感を振り払おうと、由里はぼんやり考える。

自分の境遇について悲観したことは一度もない。ただ本当に、どこまでも分からないのだ。

「お父さん」

顔も声も知らないその人に向かって由里は呼びかけてみた。けれど外国語のようなその音の塊は、耳になにか虚ろな余韻だけを残し、夜中のざわめく静寂へと消えていった。

17.

声に出した途端、言葉は意味を剥がれる。かわりに、微妙にずれたニュアンスをまとう。聞き手には、いや、もしかしてそれ以上に話し手本人の耳には、発音の色調と質感と温度だけが伝わる。

「お父さん」は透明で、ざらざらで、ひんやりした五音。それぞれの音は、まとまって何か喚起する前にさっと四方に散ってしまう。

思い返せばその他のどんな言葉だって、私の耳に直接意味を届けることはなかった。「哲也」以外は。「哲也」は七色の、触ることの出来ない、やけどしそうな三音。その音色はとりもなおさず、哲也の輪郭をしていた。言うたびに私は、期待と不安を、充足と渴望を、感じる事が出来た。

私はもう一度その名前を呼ぼうとして、のみこんだ。砕けた記憶は、鋭く尖った破片になって私を切り裂く。その切っ先をよけることが出来ない。

「おおー」

「やべえ、キレーイ」

十センチくらい開けた窓から、知らない声が入ってきた。夜風と一緒に。おそらく右隣の部屋の男子学生と、その友達だろう。前に何度かすれ違ったことがある。

私はベッドから上体を起こして窓を閉めようとした。その瞬間、ガラスの向こうのビルとマンションに挟まった空に、光る筋が見えた。流れ星？

縋るように起き上がってベランダに出た。サンダルを履くとき足元の灰皿を蹴飛ばしてしまった。マルボロの吸殻が飛び散り、灰皿がかりんかりんと音を立てて回り、隣の男子学生たちが一瞬にして静かになった。

「あの、すみません、起こしちゃいました？」

ベランダの仕切り越しに私はいいえ、と短く答えた。それに安堵したのか、酔っているのか、もうひとりの方がやけに響く声で話しかけてきた。

「ペルセウス座流星群、だそうですよ」

そうそう、と最初の声がうっとうしく相槌を打つ。

「今夜は新月だし、休日で明かりは少ないしラッキーですよ？ こんなところで見えるなんて思ってもいなかったです」

二人を無視して私は身を乗り出した。都会の小さな夜空を星々の瞬きが覆う。どこからともなく光の点が現れては、微かな線を描いて五秒と待たずに闇に消えていく。それはまるで届くことのない信号のようだった。天の誰かが地上の誰かに、繰り返し、繰り返し発している――。

『ずっと一緒にいてくれる？ 由里。ずっと一緒にいて』

でも哲也はいなくなった。夢の中以外会うことすら出来ない。

「願い事とか、しました？」

叶わないから願い事なんてするはずない。

「僕はもうしましたけど、内容は教えられません」

「それにしても、キレイな眺めですよー」

「夢見てるんじゃないかって思っちゃいますよ」

男子学生たちは一方的に喋り続けていた。対する私は、思いも寄らない最後の一言に胸が高鳴っていた。

そうだ、これこそが夢なんだ、現実じゃない！

私は私の現実に戻らなくちゃいけない。

18.

翌朝マンションに由里の姿はなかった。物語に対して全知全能の語り手であるはずの私が、主人公を見失った。

玄関の鍵は閉まっている。財布はバッグの中、携帯はベッドサイドにそのままだ。となれば近場に出かけていることになるが、ざっと市内を俯瞰してみても、それらしい人影は見当たらない。

どこまでも続く交通渋滞とクラクション。弾けたポップコーンのような人のラッシュ。それら全てがめまぐるしくも、どこか重々しい。まるで惰性的な週明けを街全体が憂えているようだ。

バイト先であるウォーターサイド・カフェにも出向いていないらしかった。もっとも、月曜日のこの時間帯はシフトでないのだから、当然のことだ。私は最後に由里がそこで働いた時のことを思い出していた。嘘の電話を入れた土曜日の午後のことだ。いつもに増して一痛々しいほど一熱心な仕事ぶりだった。注文をとる際、若い男の客が窓際の丸い観葉植物を指して、「サンドイッチにあの葉を挟むことは可能か」などと嫌がらせを言ってきたが、それにもわざわざ厨房まで聞きにいったふりをし、懇切丁寧に断ってみせたほどだった。

主のいない八畳間はやけに広々としている。ベランダに続く窓から燦々と光が注ぐ。カーテンだけが脇に寄せられたまま窮屈そうにしている。きっと昨夜引き忘れられたのだろう。

そこで私はふと、部屋の中のある小さな変化に気がついた。デスク中央の引き出しの鍵穴に、小さな鍵が刺さったままになっているのだ。

由里が引き出しの中を見たに違いなかった。何となく今、不在の理由が分かったような気がした。私はそこに何がしまわれているか知っている。そして二年前の引越しの時さえ、由里がそこを開けようとしなかったことも。

19.

急いで部屋に戻って財布から鍵を取り出した。手にするのは数年ぶりだった。先端の金属メッキが剥がれて茶色くなっているのは、かつて毎日のようにそれを使った証だった。

鍵穴を回し、取っ手を引く手が震える。もう二度と開けることがないと思っていた引き出し。宝箱。覗き込んだ途端、哲也の声がよみがえってきて、私はよろよろと床に膝をついてしまった。

「やだよー、俺写真写り悪いんだよ！ 画家が百倍くらい格好良く描いてくれる時代に生まれたかった」

「高校生にもなって水族館！ ありえない？」

「『死』は『無』だよ。天国もないし地獄もない」

痛み。極彩色の悲しみ。封じたはずの思い出がもたらすもの。それでも私の現実はどこにある。この思いの中に。

夢から覚めたい。覚めなくちゃいけない。私は深呼吸した。そうして引き出しの奥の小さなケースにそっと手を伸ばした。

20.

宝箱。デスクの鍵付きの引き出しのことを由里はそう呼んでいた。

小学校に入る時に祖父母から与えられたデスクだった。

「どうして鍵があるの？」

と尋ねると、祖父が教えてくれた。

「大人の方はねえ、大事なものを、自分だけのものをしまっておくんだよ。自分以外の方が絶対見られないところにね。由里ちゃんはまだ大人だから、おじいちゃんたちからプレゼントだ。昔、お母さんの引き出しにも鍵がついていたんだけど、お母さんはそこに数学のテストを隠したんだ。出来が悪くて叱られると思ったから。由里ちゃんはそんなことしちゃ絶対だめだよ。宝物だけを入れておくんだ。由里ちゃんの宝箱にするんだからね」

宝物が増える度に、由里はせっせと引き出しを開けて大切にしまいこんだ。それは学年が上がるにつれて、道で拾ったきれいな石やポケモンのシールから、仲良しの子とおそろいで買ったペンケースや手紙になった。小五の時はじめて満杯になって以降、今まで何度も引き出しを整理しているが、何か重要なものがあるといつそこに入れてしまう。その習慣は中学生になっても高校生になっても続いた。

ある時由里は嫌がる哲也を無理矢理プリクラ機に押し込んだ。ポーズをとって、合計三枚分も撮ったのに、二人してどれもいびつな表情をしていた。

「キモイし！」

ハサミでプリクラを切り分けながら爆笑してしまったけれど、両替しに行くふりをして内緒でカラーコピーした。帰宅して一方を手帳に貼り、もう一方を引き出しにしまってから、ふと思いついては取り出して、眺めて、吹き出した。

五月に哲也の高校で遠足があった。新入生オリエンテーションの一環で、「課外授業」という位置づけだったが、行き先が隣町のアクアランドであることに哲也は憤慨していた。

「どうだった？」

遠足翌日、からかうつもりで訊いてみると、

「イルカ触ったよ。初めて！ たまたまイルカショーやっててさ、ショーの終わりにくじで当たっちゃってプールに上げられて……」

と、満更でもない様子でお土産を差し出した。ロゴ入りのイルカのキーホルダーを由里は半ば呆れながらしまった。

夏休み間近には「教材の詩を踏まえた自作詩の提出」が宿題として出された。由里は国語が大嫌いだった。

「しかもテーマは『死』だよ？」

哲也の家のダイニングで、のぞみと一緒にそう愚痴った。哲也は、死は無だと主張した。心臓が止まって脳の働きも止まる。火葬されて自分を構成していた諸々の構造物は灰になり、煙になり、ばらばらに外界に散っていく。だから、とのぞみがトイレに行った隙を見計らって、
「生きてるうち、今のうちに、俺のこともっと好きになってくれないと困るよ？ なるべくはや

めに？」

そんな経緯で書き上げた詩はとても提出できそうになかった。赤面しながら由里はそれを引き出しに押し込んだ。こんな一編だった。

死後の魂を

私は信じていない

だけど残したいんだ

ひとかけらだけ

あなたの一日の幸せを願うために

あなたの家路の安全を祈るために

残したいんだ

あなたの健やかな眠りと

穏やかな目覚めを見届けるために

残したいんだ

あなたの笑いを呼吸して

涙を盗み取ってしまうために

残したいんだ

あなたの細胞のひとつずつに潜んで

同じ星の上をさまよい

同じ時の中を泳いで

同じ海へ溶け込むために

残したいんだ

ほんのひとかけらだけ

ここに残したいんだ

愛する心の核を

21.

いつだって肌身離さず付けていた。玄関でサンダルを脱いだ時、

「それって」

と、のぞみがすぐに気がついて私のネックレスを指差した。戸惑いながらも、私はちょっとトップを上にひっぱって、

「もらったんだ……哲也に」

「知ってる。私、一緒に選んだ。どんなのがいいか分かんないから来てくれって、生理痛酷いつて言ってるのにお店連れてかれて。二時間も迷ってんの、クローバーかハートかってだけで。

『どっちだって哲也からのなら喜んでくれるよ』って、私言ったのにさ。ハートじゃ『いかにも』ってカンジでセンスないかもとか、けどクローバーじゃのぞみが持つてるヤツと微妙にかぶるとかって。……まあ、上がって」

今思えばのぞみはスリッパを出し忘れた。私は素足のまま玄関を上がった。

リビングはがらんどろだった。そこにはかつて私がベビースターをばら撒いたこげ茶色の絨毯も、角で膝をぶつけた高そうなテーブルも、その上で初めて哲也とキスした革張りのソファも、もうなかった。

「進んでるんだね。引越しの準備」

のぞみはかぶりを振った。

「私はほとんど何もやってないの。全部親戚任せ。片付けようと、捨てたりまとめたりしようとするんだけどさ、なかなかできないんだよね。ここにみんながいたと思うと」

そう言って何も無い空間を見回した。ねえ、多分哲也、由里ちゃんに気があると思うよ。帰り際にドアのところでそう耳打ちされたのが、百年も前のことみたいに思えた。

「あ、お線香、あげてくれる？」

私は頷いて、逃げるように奥の和室へ入った。

仏壇はなかった。代わりに折りたたみ式テーブルが出してあって、その上に遺影というよりも普通の写真立てに入れられた普通のスナップや、ドンタコスや三ツ矢サイダーの五百ミリのペットボトルや、車の模型や、キティーちゃんや、未成年なのに麒麟淡麗〈生〉が置いてあった。あまりに説明的な、衝撃的に穏やかな光景だった。線香に火を点けてからも、私はしばらく手を合わすことができなかった。

窓外の郵便屋のバイクの音が、昨日と変わらない日常の続きを物語っている。線香の香りがじんわりと鼻孔に広がり、哲也は本当にいなくなったのだと優しく私を諭す。信じたくなかった。そう、いつだって哲也はメールの返信が遅い。気にしないようにしつつも五分おきに携帯を開いて、その度にながかりして、諦めて他のことにとりかかって、忘れた頃にお気楽なメールが来るんだ。今回もきっと同じはずだと、心のどこかで本気で思っていた。今にも携帯が鳴るはずなのに、目の前の現実はいとも簡単にそんな希望を打ち崩す。

いつの間にかのぞみも部屋に入ってきて、私の少し後ろに座っていた。くしゃみの音で気付いた。驚いて振り向くと、

「来てくれてありがとね」

と、取って付けたようなことを言われた。長い間沈黙が流れた。

「私ね」

再び口を開いた時、のぞみは静かに涙を流していた。

「分かってた……あの日、哲也に何か起きてるって。双子って、感じ取れるの。近くにいないくても、何となく気配っていうか、予感っていうか。嫌な感じがした。けど私、電話もメールもしなかったし家にも帰らなかった。言い訳にしか聞こえないだろうけど、二、三日前からケンカしてたの。何でだったか忘れたけど。それに私、美奈子ん家に泊まることになってた。ほら、あの時期美奈子、退部しようか悩んでたから話聞いてあげたくて。ごめんね。由里ちゃん、ごめんね。だってまさかこんなことが……こんなことが……」

あの日、私の顔を覗き込んだ時の、哲也のあの表情。「ずっと一緒にいてくれる？」と訊いた哲也の真意。どうしてその心に踏み込めなかったんだろう。哲也は思い留まったかも知れないんだ、私がただ一言「うん」と言えば！ 何も言えなかった。嫌だったからじゃない、怖かったから。哲也を信じて失うのが怖かったから！

卑怯だと、どこまでも卑怯だと分かっているけど、目の前ののぞみに告白出来なかった。のぞみに対して、私自身に対して、もしくは私達を閉じ込めたこの現実に対して、激しい怒りと悔しさと悲しみが込み上げて、私はただ震えていた。

さよならも言わずにあの家を後にした。そして自宅に帰り着くなりネックレスを外して、ケースと『宝箱』で二重に覆い、永遠にしまった。

22.

引き出しの中からはやはり、一番大切なはずのネックレスがなくなっていた。乱雑に重なったプリクラや詩の上に、蓋の開いたケースだけが残っている。

由里がネックレスを取り出したことは一目瞭然だった。だとしたらそれをどうした？ またそのことと由里の不在との関係は？

捨てたり別の場所に移したりしたとは到底思えなかった。部屋のゴミ箱やクローゼットの中に見当たらないことも、それを裏付けている。

だとしたら由里が持っている。もしかすると身に付けている。やはりだからこそ、と私は結論に至る。だからこそ由里はいなくなったのだ。マンションから、浮橋から、いや、きっとこの物語から。

23.

記憶が駆け抜けていく。一気に私の中を。

何も変わっていない。もう一度手にしたネックレスのひんやりとした感触。シルバーの光沢。ピンクのストーンの輝き。全部あの日のままだ。首筋に、付けてくれた時の哲也の指の温度と、関節の硬さが蘇った。思わず身が強張った。躊躇や自責やおそれが絡まって、チェーンを外す手がもつれた。

もう一度深呼吸した。やっと外れたチェーンの両端をしっかりと持った。それを小さな頃初めて自転車に乗った時みたいにゆっくり、ぎこちなく首に回す。

首と肩に伝わる軽やかな重み。懐かしさが、嬉しさが負の感情をすっと押し流していく。そうかと思えば一気に押し寄せ、鋭い痛みを催し、また引いていく。私は待った。意志の芯にぎゅっと掴まって、のまれまいとした。そうするうちに心臓の鼓動が速度を緩めて、少しずつだけれど私は落ち着きを取り戻すことができた。

鏡を直接見る勇氣は無い。うろうろした挙げ句、代わりに窓ガラスをそっと見やった。夜の闇の中、向かいの建物を背景に、私を含む部屋の一部が浮かんでいた。

けれど気のせいだろうか、そちらを向いた瞬間には黒みがかって写っていた半透明の私の像が、だんだん本物みたいに色鮮やかに、不透明に見えてくる。

いや、気のせいじゃない。今となっては髪の毛の一本一本や、Tシャツの細かい襞、ネックレスのトップの穴まではっきり分かる！ 写っているんじゃない、窓ガラス越しに私は私と向き合っている！

まばたきも忘れて吸い込まれるように手を伸ばした。窓ガラスの向こうの私は微笑んで手招きした。

24.

物語の始まりの場所である『足跡』を、私は今じっと見ている。由里のいた頃よりも少しだけ周りの木々は高く伸びている。昨夜ジェシカから元テニス部員達が拾い忘れたビールとチューハイの空き缶が二本、いじけるように中央の草叢に転がっている。

風がそよいでいる。夏の午後の陽射しの中で、瑞々しい木の葉が柔らかく揺れ動いている。テニスコートからは、由里の後輩達の掛け声が威勢よく響いてくる。微かにではあるが確かに、秋の香りが大気に混ざっている。

由里は私の知っていた、語ろうとしていた由里ではもはやなかったのだろう。そう考えるのが一番自然に思えた。過去を否定し続け、罪悪感に苛まれ続ける用意されたリアリティとは別のものを、ある時見つけ出し、自らの手でそれを獲得した。結果として、意図的にもしくは偶発的に、物語を抜け出すことになったのだろう。

一瞬、『足跡』の入り口の方で足音がした気がしたが、空耳だった。私はあの日由里が思い描いた階段を想起して、はるか頭上に浮かぶ綿雲に向かってかけた。

「木の階段？ それともコンクリートとか金属？」

「家や学校のみたいなのは、俺、嫌だね。ちゃっちいじゃん」

「じゃ、真っ白の大理石とか？ 超広いの。どっかのお城みたい」

「いいねえ、豪華！ 由里姫にふさわしい」

二人の楽しげな会話がよみがえる。

また出会えるだろうか？ 語るべき新たな物語の中で、由里に。

少し強くなってきた風を、私はぴんと弾いた。空と大地が回り、世界が百八十度逆さまになった

。

25.

どこに立っているんだろう。私の部屋でも、ベランダでもない暗い宙の中に私たちはいた。

伸ばした手は窓ガラスを突き抜けて、もう一人の私の腕を掴んだ。もう一人の私は優しくそれを振り解いて、私の手を握った。怖かった。頭が混乱していた。でも全て正しいこと、起きるべきことが起きているのだという不思議な確信がどこかにあった。

もう一人の私が宙の中を踏み出した。私の目を穏やかに見据えたまま。繋いだ手が引っ張られて、つんのめりそうになった。私を誘ってるの？ どこに行くの？ 聞きたくてもどうしてか声が出ない。けれど迷っている時間も余裕もない。一瞬のうちに意を決して私もそれに続いた。夢から覚めたい。覚めなくちゃいけない。

確かな足取りでもう一人の私は進む。急ぐわけでも、私を待つわけでもなく、日課のウォーキングみたいに。見失わないように、私は手を繋いだままそれについていく。そうやって、どれくらいの間だったろう、私たちは歩いた。透明な一本道を。壮大な夜の中を。流れ星がシャワーのように降り注いでいた。空に浮かんでいるのかと思って足元を見下ろしたけれど、星の光以外にはどこまでも深い紺色の闇が続くばかりで、街や自然らしいものは全く見えなかった。

いつからか静寂の物陰で口ずさむように木々のざわめきが聞こえ始めた。森だろうか？ 辺りを見回してもやはり何もない。ほどなくしてもう一人の私が立ち止まった。ぶつかりそうになって慌てて私も止まった。胸元のネックレスがはずみで大きく波打った。

するとその胸元のネックレスに青い明かりが灯った。まるでネックレス自体が光を発し始めたように。明かりは青から水色、白へと明度を上げながら見る見る膨張する。驚く私はあっという間にそれに飲み込まれる。

眩しい。目を開けていられない。堪らず繋いだ手を離して顔を覆ってしまう。見えない。何も見えない！ もう一人の私は？ 手探り。でも分からない。突然肌に焼けるような痛みが走る。熱い！ 誰か助けて！ 木々のざわめきが大きくなり熱風が吹きつける。

私は叫んだ。真っ白な闇を裂いて。声なき声で。助けて。熱い。何も見えない――。

「ずっと一緒にいてくれる？ 由里。ずっと一緒にいて」

気が付くと私は草原に伏せていた。目の前に一面の緑と、ビールとチューハイの空き缶があった。

頭の中には、いや体中の血や呼吸の中、肌の表裏には、哲也の声が響いていた。あの日と同じように。心の中で、私は初めて返事をした。いてもいい？ そんな資格ないって分かっているけど、それに哲也はもういないけど、私、思い出の中でずっと一緒にいてもいい？

肌の痛みはもう感じなかった。完全に消えているようだ。調べてみても火傷の痕や傷はない。何だったんだろう、あの明かりは？ もう一人の私は？ 少し力んで私は体を仰向けにした。

答えの代わりに青空が広がっていた。とは言っても、周囲の背の高い木々に遮られて、丸く切り取られたような形になっている。どこか見覚えのある風景だ。ふとそう感じた瞬間、さっきとは

別の、もっと重大な問題とその答えが一気に押し寄せた。ここはどこか、ということだ。私ははっきりと悟った。『足跡』なのだ。

いてもたってもいられなくなり、私は起き上がった。少し眩暈がした。どうして、どうやってここに？ もう一人の私、光るネックレス、声、『足跡』……過去に戻ってきたの？ 哲也が私を呼び寄せたの？ 背後で人の動く気配がする。

「哲也？」

思わず振り向いて呼んでしまったけれど、もちろん気のせいだった。誰もいない。ただ風が吹き抜けただけだ。足元の草が揺れている。今にも泣き出してしまいそうで、私は両手でネックレスを掴んでぐっと耐えた。

「集合ー！」

風に乗って懐かしい声が聞こえてきた。コーチだ。それともこれも幻聴なんだろうか？ 全部私の願望の産物だろうか？ 本物と幻の区別が付かない。恐怖心と困惑と孤独が戻ってきて逃げ出したくなった。けれどそれと同時に、もう一人の私と並んだ時のあの不思議な確信をも思い出した。それはまだ消えることなく私の内に宿っていた。私は顔を上げて、『足跡』の入り口にある天然の枝葉のアーチをくぐり、雑木林に入った。夢と現実の境目さえ分からないのだ。だからこそ進むべきだ。何か現実的なものを自分の手で確かめるまでは。

けれどテニスコートに行き着くことはできなかった。雑木林の抜け道を二、三步進んだ途端、行く手の木の間、浮橋の自宅のマンションが小さく浮かび上がったのだ。

私は驚かなかった。ただ息を殺して背丈くらいのマンションと、その最上階の誰もいない自分の部屋を見つめた。正面に並ぶ窓の中で、唯一カーテンが開いたまま明かりが付けっぱなしになっている。

その窓にふと黒い影が映った。目を凝らすと、もう一人の私が私を見つめ返している。その体はだんだん立体感を失いつつあった。分身のように鮮やかだった生命体から、初めの頃の黒みがかかった、二次元的な半透明の像に戻っていく。

触れようとしても届かない。私はもっと近寄ろうとした。けれど足を出すより先に、急に視界が歪んで、ものすごいスピードで地面と空が反転した。そう理解した時にはもう、私は何の苦もなく当然のように木漏れ日の上立って、抜け道を仰いでいた。しぼみかけた露草が掌に落ちてきた。目の前の木の間からはもう一人の私やマンションが消えてしまって、代わりに暗い紺色の空間が広がっていた。ここを通過して来たに違いない、と直感的に思った。

空間は今にも壊れてしまいそうにゆらゆら動いている。私は露草をハーフパンツのポケットに無造作に入れてから、中を覗いた。相変わらず道らしいものは見えない。物音も全くしない。けれど奥の方に細長い建物がひしめき合っている。マンションやその周辺の見慣れた浮橋の街だった。最後の一滴のような流れ星が静かにその上に滲んでいった。

ここに一步踏み込めば、また向こうに戻れるのかも知れない。またベランダの窓ガラスを開けて、自分のベッドや机やクローゼットや、『宝箱』に囲まれて元通りの生活ができるのかも知れない。帰り道はまだ閉ざされていない。

けれど私は思った。決して戻りはしないと。私の見るべきものや聞くべきもの、感じるべきもの

はきつとこちら側にある。それは巧みに隠れてとらえられるタイミングを窺っている。行こう。私は踵を返して、『足跡』を顧みた。思わずあっと声を上げてしまった。入り口のアーチのすぐ向こうに、さっきまではなかった大理石の階段が現れ、空の中に続いていた。

26.

やはり足音がする。風の音や木の葉の音、蝉の声、鳥の羽音に紛れ込んで、誰かが階段を下りていく。姿は見えない。けれど一步一步踏みしめるように、その感触を確かめるように、ゆっくり、止まることなく空の中を進み続けている。

由里以外に考えられるだろうか？ もしも開けられた引き出しとなくなったネックレスが、「より幸福な物語の予兆」の足跡だとしたら。私は音を辿って、果てしない青空を覗き見た。吸い込まれそうな大空を。いくつもの小さな雲が無邪気にじゃれ合っていた。その奥で一番大きな綿雲が寝そべり、優しく見守っていた。まわりには陽の光が咲き乱れていた。それはまるで衰えることを知らない。世界全体を埋め尽くすように、『足跡』の草叢へ、雑木林の木々の梢へ、テニスコートや部室の窓へと逞しく広がっていく。

空を横切って、白く照り輝く長い階段が、綿雲の胸元に飛び込んでいく。再会を待ち侘びて。次第に遠ざかり小さくなる足音を聴きながら、私はいつまでもその光景を見つめていた。

(完)